太陽－Beast Friends－

夕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
太陽－Ｂｅａｓｔ　Ｆｒｉｅｎｄｓ－

【Ｎコード】
Ｎ２２５９Ｓ

【作者名】
夕

【あらすじ】
平和な街、エリル。しかしエリルには、こんな言い伝えがあった。“この街の周りの森には、動物の耳を持つ化け物が住み着いていて、街を襲おうと狙っている。今は息を潜めているけれど、いつかきっとエリルを襲撃してくる。”と。人々にケモノと呼ばれる種族の少年と、ケモノの差別をなくそうとする人間の少年。そんなふたりの物語。
第１章『ウサギ跳ねたその朝に』完結しました。

第1話

朝だ。
気持ちのいい日差しが降り注ぐ。
風が木々を揺らして吹き抜けていく。
それらにつられるように、洞窟の中からひとりの男の子が駆け出してきた。
１０歳くらいに見え、黒髪と対照的な白い帽子を深くかぶっている。
男の子はきょろきょろと周りを確認してから、洞窟の入り口付近にある３ｍはあるだろう岩に跳び乗った。
そしてもう一度周りを確認して小さな声で言った。

「おはよう…父さん、母さん」

それは太陽に向けてだった。
男の子はしばらく眩しそうに太陽を仰いでいたが、やがて岩から跳び降りた。
ストンと身軽に着地する。

「また、長い今日が…始まるな」

男の子が洞窟の中へ戻っていき、残されたのは風と木々の音だけになった。

――――――エリルの街に朝がやって来た。
薄暗かった街の通りが少しずつ照らされていく。
レンガ造りの建物にも眩しい光が差し、深い眠りから住人をすくいあげていく。
目を覚ました人々は、それぞれ身支度を整え、外出したり仕事を始めたり。
こうしてエリルの街は賑わっていく。
太陽も輝きを増しながらだんだん昇っていく。
街の中心部の広場では、噴水が光を受けて輝いた。
それをバックに話に盛り上がっているのは数人の若者。

「なあなあ、昨日すごい情報手に入れたんだ」
「情報？どんな」
「密かな大ニュース！」
「密かなって…なんであんたが知ってるのよ」

噴水の水がおさまった。
一瞬、その場が静かになる。

「アキも知ってるよな」

が、噴水はすぐにその勢いを取り戻す。
アキ、と呼ばれた少年は噴水の周りの囲いに腰かけた。
冷たい水に手を浸す。

「知ってる、けど」
「じゃ、アキから発表してもらおーぜ」
「はあ？なんで俺が…」
「いいから、いいから」

真夏の空が水面に映し出されている。
再び水は噴き出すのを止め、波のない水面は空色に見えた。
「…俺の父さんが、森に住むケモノを殺したんだよ」
勢いよく噴き上がる水は水面にぶつかり空を揺らした。
「ケモノって…あのケモノ…？」
「そのケモノだ」
「人間の姿をした化け物なんだろ？変な耳生やしてる」
「変な耳じゃなくて、動物の耳」
アキが注意しても、仲間達は興味がないのか直さない。
「アキの父ちゃんって強かったんだな。ケモノって凶暴らしいじゃん」
「父さんが殺したのは黒ウサギのケモノ。ウサギが凶暴だとは思えないけど」
――アキのその一言でその話は終わってしまった。
彼らはそれからしばらく話していたが、正午が近づくにつれて、1人、また1人と帰っていった。
アキも広場から出て家へと急いだ。

第1話（後書き）

この小説は、一度ノートに書いたのを写していこうと思っているので、更新が速いと思われます。

第2話

「アキ！」
「ん？」

帰路の途中、後ろから声をかけられた。
聞いてうんざりするような高い声。それも、よく聞く。

「何してたの？」

振り返ると、大きな紙袋を抱えた男の子がにっこりしていて、アキはやっぱり…と呟いた。

「――カイ」
「またお友達とお話？」
「…ちょっと、な」
「もぉ、おかげで僕の仕事が増えたじゃないかっ」

カイはアキより五歳下で１０歳の弟だ。
女の子のような名前のくせに無愛想なアキに対して、カイは誰にでもすぐなつき可愛がられる便利な性格である。

「これ持って」

紙袋を無理矢理アキに押しつける。

「なんでだよ」
「僕、疲れたから。アキはお兄ちゃんでしょ」

渋々受けとると、やけに重い。
触った感じも固かった。

「なに入ってるんだ？」
「お父さんの武器とかだよ。ケモノ狩りの」
「ケモノ狩りって…また行く気なのか？」

カイは目を輝かせている。
カイは父のケモノ狩りに憧れを抱いているのだ。僕もお父さんみたいになりたい、と。

「うん。お父さん今度はもっと強いやつ倒してやるって言ってたよ」
「……ふーん」

紙袋を揺するとガチャガチャと金属のぶつかる嫌な音がした。
おそらく銃などが入っているのだろう。
カイにこんなものを買わせるとは。素直に買いに行くカイもだが。

「最近ハマり過ぎだよな」
「でもケモノ狩りしてるのって、エリルでお父さんいれて3人しかいないって。だからエリルを守るにはお父さん頑張らないと！」

アキはふぅ…と長い溜め息をついた。

「ケモノが街を襲ったことなんかないだろ」

———家に着くとカイが玄関を開けてくれて、アキは中に入った。
奥の部屋から話し声がする。

「父さん、いるのか？」

紙袋を抱えたまま奥の部屋に向かうと、いいにおいが漂ってきた。
母が昼食を用意してくれているのだろう。
このにおいは…アキの好きなスープだ。
部屋に入るとやはり父がいて、なにやらご機嫌だった。

「ただいまーっ」
「…ただいま」
「お帰り。カイ、アキ。ああ、アキ、それは預かろう」

父は机の上に何か黒い物を並べているところだったようだ。

「ふたりとも座って。これを見てごらん」

父に促されるままに、アキは机に着いた。
カイもアキの隣に座る。
――と、そこへ母が食事を運んできた。

「今日はアキの好きな卵のスープよ」

黒い布のようなものを鬱陶しそうによけながら、母は料理を並べていく。

「おい、これは貴重なものなんだぞ。そんなふうに扱わないでくれ」
「はいはい…、知ってるわよ。でも、そんなものを机に並べないでちょうだい。これからご飯なのよ」

貴重なもの？そんなもの？
目の前の黒いコレはいったい何なのだろう。

母も椅子に座り、家族４人がそろった。
アキが布の正体を探りながらスープを口に運んでいると、父が急に席を立った。

「アキ、これが何かわかるか？カイもだ」

そして黒い布をひらひらさせる。
よく見ると、布の表面は柔らかそうな毛に覆われていて艶々と光っている。
思わず触りたくなってしまう、そんな不思議な輝きをその布は持っていた。

「いや…知らない」
「僕も。あっ！お父さん、お母さんに内緒で高い布買ったんでしょ」
カイが言うと、母は大きな溜め息をついた。
「残念だけど、私はそれが何なのか知ってるわ。それはねぇ…」
「言うな。お父さんから言わせてくれ」
なぜか嫌な予感がしたが、アキも黒い布の正体が気になって料理を口にするのをやめた。
――時は昨夜までさかのぼる。

１６時間前。つまり昨日の午後８時だ。

「たっだいまー」

父がやけに高いテンションとともに帰ってきた。
うっかり鞄をぶつけ、大事にしている『ケモノ狩り許可』の額が倒れても気にしないほどに。

「どうしたの？お父さん」
「カイ、聞いてくれ！お父さんは遂にやったぞ！」
「？」

その騒ぎを聞いてアキも父を迎えに出た。

「なんか、あった？」
「アキ！父さんな、遂にケモノをしとめることに成功したんだ！」
「……え」
「黒ウサギのケモノだ。ケモノはもう業者に渡してきたから、見せるわけにはいかないが」

父は、でも明日には必ず見せてやる、そう言って自室に行ってしまった。

「アキ！お父さん凄いんだね」

カイはそうはしゃいでいたが、アキはどうもすっきりしなかった。
胸の辺りがもやもやするような、そんな気分だった。

「それ…昨日言ってた…」
「そうだ。朝、業者に無理言って貰って来たんだよ」
と、いうことは…これは。
「ケモノの耳、か？」
黒ウサギの耳。
それで作られた毛皮は、漆黒の輝きを持っていた。
「凄いだろ？肉食動物のケモノじゃあないからそれほどでもないが、街から金も貰えたんだぞ」
「……どのくらい」
「２０００リンと少しだ」
２０００リン、安い服が2、3着買えるくらいだ。
そんなに大した金額ではない。
「お父さん、ケモノってどんな格好してるの？」
カイが興味深そうに目を輝かせて質問する。
「ん？ケモノはな、カイやアキと同じような姿をしているんだ」
今日、仲間達も“人間の姿をした化け物”そう言っていた。
エリルに住む者なら大人でも子供でも知っている、こんな話がある。
この街の周りの森には、動物の耳を持つ化け物が住み着いていて、街を襲おうと狙っている。今は息を潜めているけれど、いつかきっとエリルを襲撃してくる。――と。
その化け物は“ケモノ”と呼ばれている。

そして、そのケモノを狩るのがアキの父の仕事だ。

「ただ、ケモノにはカイみたいな耳はついていなくて、頭に動物の耳がはえているんだ」

「……じゃあ…」

「どうした？アキ」

「それじゃ…父さんは俺達と同じ姿のやつを殺したってことか？」

耳だけは違うが、外見は人間と変わらないのに。

「何を言ってるんだ、アキ。ケモノはケモノだ」

「……そういうもんか？」

そうは言っても、やはり気分は晴れない。

食べるのを忘れていたスープは、冷たく冷えていた。

第2話（後書き）

第3話

その日の夜だった。
アキがリビングのソファでひとり本を読んでいると、父さんが急にこう言ってきた。

「アキ、明日は一緒に行ってみないか？」
「どこに」

分かってはいた。
でも、わざととぼけてみせた。
行きたくないから。

「ケモノ狩りにだよ」
「行かない」

瞬間で断って、読んでいた本に目をおとす。
と、言っても内容は全く頭に入っていない。
ケモノ狩りに行くかだって？そんなものに行ってたまるか！
ケモノ狩り――普通に考えれば、街を守るための正義の行為かもしれない。でも、こんなの間違った正義だ。
アキの言い分だ。言ったことは一度もないが。
同じ人類を差別して…殺して…これが許されるのだろうか。

「俺はそんなこと、したくない」
「なんだと？」
「ケモノ狩りなんてしたくない。カイをつれて行けばいいだろ」
めったなことでは熱くならず、父の言うことは聞いておけば後でめ

んどくさいことに巻き込まれない…そんな考えの持ち主のアキでも、これば かりは譲れない。

「カイはまだ小さい」
「それならひとりで行け」
「でもな、父さんが引退したらケモノ狩りをするのはアキなんだぞ？」

父はアキの隣にどっかり座った。

「俺はやらない」
「何を言ってるんだ。エリルを守りたくないのか」
「ケモノが街を襲うとは思えない」

父が口を閉ざした。
どうやら、相当イライラしているらしい。組んだ腕や、貧乏揺すりから、それが分かる。

「とにかく…行かないから」

本を置いて立ち上がる。
今は部屋に逃げ込もう。それがいい。

「待ちなさい、アキ」

ソファが軋む音がして、大きな手に腕を捕まれた。
父の握力は無駄にある。
しかも気が立っているせいで力が込もっている。アキは静かな痛みに顔をしかめ、ため息をつきながら振り返る。

「何……」
「いい加減にしろッ！」
今度は頬に激しい痛み。
「な……っ」
痛みの原因を理解したのは、ガタッとソファテーブルにぶつかって尻餅をついてからだった。
見上げると、父が拳を握って仁王立ちしていた。
そうか…父さんに殴られたのか…。
あまりにも突然のことにアキはぼーっと父を見た。
「うちは代々ケモノ狩りをしている。それをお前の代で廃れさせる気か！？」
アキを現実に引き戻したのもやはり父。
「……それでも」
「なんだ」
「…やっぱり、間違ってると、思う…」
こんな父は初めてだった。
いつもはバカなこと言って、母に怒られて、それでもやっぱり懲りないで…にこにこ笑ってるのに。
「なんで、そう思う」
「……ケモノは俺達と同じ、人間…じゃないか」
「なんで、そう思う」ふと父が思い直すかもしれないと、僅かな可

能性に期待してみたが、父はさも可笑しそうにわらうだけだった。
「同じだと？あいつらと街の者が？」
思い出した、というように殴られた頬が痛みだした。
もう、少しの期待も出来なかった。
「…あぁ」
「そんなわけがない！あいつらは化け物だ」
「……」
もう何を言っても無駄だ。
長い沈黙ののち、アキは痛む頬を押さえながら立ち上がった。
「明日…行くよ」
「当たり前だ」
歩き去ったアキの後ろで、父は満足気に頷いた。

第3話（後書き）

よろしくお願いします。

第４話（前書き）

長らくお待たせいたしました。

第4話

部屋に入るとアキはすぐさまベッドにダイブした。
最近、父はケモノ狩りのことしか考えていない。先代までの功績に比べて、自分が結果を出せていないからなのだろう。

「だからって…俺を巻き込むなよ…」

と、ドアが開いて、カイが入ってきたようだ。

「アキ？さっきの音なに…？」

「んー…」

アキとカイの部屋は同じだ。
だからこの部屋にはベッドがふたつ並んでいる。
カイがアキの隣、自分のベッドに転がってきた。

「ほっぺた、赤くなってる…」

そう指摘され、慌てて頬を隠すが、もう遅い。

「それ、どうしたの？さっきの音と関係ある？」

ちょうど好奇心旺盛な年頃だ。

「誰に叩かれた？いつ？」

アキは沈黙を決め込むが、質問は止まらない。

「……」
「ねぇ、どうしたの？」
アキが背中を向けても、弟は回り込んでくる。そしてまた追求の繰り返し。
「アーキー」
「……うるさい」
「うるさくないし！答えてよ」
背中をぺしぺし叩かれる。
普通だったらこのへんで怒りが頂点に達して、カイを部屋から追い出していただろう。
しかし今はそんな気分にもならなかった。
「はぁ…。カイには関係ないだろ」
「あるもん！僕もう１０歳なんだよ」
「もう１０歳？それなら、その子供っぽいしゃべり方やめろ」
ガツンと言ってやると、カイは自分のベッドに戻っていき、やっと静かになった。
と、思いきや、枕を持って再びやって来た。当たり前、と言うように、アキの隣にうつ伏せに転がる。
「アキが言うまで、僕は寝ないからなっ」
語尾を「ねっ」から「なっ」に換えたのは、子供っぽくならないよう、カイなりに気を付けたつもりなのだろうか。

「…じゃ、俺はカイが起きてる間は言わない」
「なにそれ！そんなの！～っ」
足をバタバタされると、それに合わせてベッドが揺れた。
「こら、壊れる」
それに音を立てたら父さんが見に来るだろ。そう言いかけてアキは慌てて口を閉じた。
そんなこと言ったら、カイが連れてくるに決まっている。
今はもう父とは顔を合わせたくないのだ。
「言ってくれないと、やめないんだからな！」
「言葉遣い、不自然」
「うるさい！」
本当にそろそろ静かにしてくれ。
「意地悪！」
父さんが来るだろ。
「鬼！」
「そこまで言うか？」
「なんで教えてくれないの――――！」
足をバタバタする音は、もはや騒音と言ってもいいほどうるさい。
「…あーもー…わかったよ」
「やったぁ！なんでなんでっ？」

「カイが小さいから」
「……それ、答えになってない！アキのバカ！」
また暴れだすカイを、今度はしっかりと捕まえた。
「いや、なってるし。カイがもっと大きかったら、俺はこんなことにならなかったの」
カイはきょとんとした表情（かお）になっている。
「どーゆうこと？」
小さな溜め息をつくと、アキはこれまた小さな声で言った。
「明日…父さんとケモノ狩りに行くことになった。で…行かないって行ったら…殴られた」
「え――？なんで行かないって言うの？」
僕だったら絶対ついて行くのに、と予想通りの反応。
「…さあ、な。とにかく、明日はいないから」
「僕も行きたい！」
「……楽しくないと思うけど？」

第４話（後書き）

つ、次こそ１週間以内に…っ

第5話

「アキー、ついて来てるかー？」
「……ああ」

不機嫌なアキは今、すっかり元通りな父と一緒に森の中。つい一時間前――昼過ぎに家を出てきた。
エリルは周りを森に囲まれているため、少し街のはずれまで来ると、そこはもう緑生い茂るケモノのテリトリーなのだ。
やはりカイは許しが出ず、アキは父とふたりきりのこの状況にかなりイラついていた。
腰のベルトには、少し小ぶりだが、本物の銃がさしてある。
これは朝、父に渡された物で、“自分の身は自分で守れ”ということらしい。
まったく、実の息子に何を言っているのだろうか。

「その銃、いつでも撃てるようにしとけよ？ケモノがいつ襲ってきてもいいように」

と言う父は大型のライフルを背負っている。
エリルでは、ケモノ狩りの許可を得ている者のみ、武器を持つことが許されている。アキは父が同行している、という理由で街の許可がおろされていた。ケモノ狩りに行くには街の機関への届けが必要なのだ。

「ここだ。父さんが前に黒ウサギを倒したのは」
「……ふーん」

ここで、ひとつの命が失われた。
それも自分の父の手によって。
そう思うと、無意識に息が詰まった。

「洞窟と広場…。……家と庭みたいだ」

主を失った家と庭は必要以上にがらんとして見えた。

「じゃあ、父さんは早速行ってくる。アキはどうする？」
「あ、…一緒に行かなくていいんだ」
「来るか？」

父はアキの呟きには全く興味を示さず、銃を担ぎ直した。

「ひとりで、頑張る」

アキがそう言うと、父は満足そうに、頑張れと頭をぽんとして去っていった。
父の背中が隠れて…現れて…今、見えなくなった。
アキはそれを確認すると、広場の中をぶらぶら歩きだした。
ついてこいと言われなかったのは、ラッキーだった。これで、どうだったか訊かれても、駄目だったとそれだけ言っておけばいいからだ。
と、言っても…父は当分帰ってこないだろうし、時間がありすぎる。
――ふいに腰の銃に手が当たって、その存在を思い出す。
引っ張り出してじっくり眺める。

「父さんに使われなくてよかったな」

使われてたら、お前はケモノを殺してた。

「…って、銃に話しかけるとか、俺はバカか」
銃をぽーんと高く放り投げた。
予想以上に高く投げすぎて、なんとかキャッチしてから、ほっと息をつく。
「…よかった、ロック掛けてて」
今日の俺、おかしいと自分で思ってから、アキは再び銃をベルトに納めた。
そしてまた、広場の中を歩きまわる。

――そんなアキの行動を見ている人物がいた。
「何やってんだ？あいつ…」
洞窟の中から素早く走り出た男の子は、白い帽子を飛ばないように両手で押さえ、木の影へ隠れた。
「へんなやつ…」
アキはそんなことには全く気づいていない。
「なんで、こんなところにいるんだ？」
男の子はパッと隣の木へ移った。
そうやって少しずつアキに近づいていく。

「ヒト、だよな…？」

――と、突然激しい風が駆けてきた。
この時期に吹くことは滅多にない風だ。

「ぅわっ…！」

だから、男の子は油断していた。

「……あっ、な、ない！」

風は見事に男の子の頭から帽子を奪い取っていったのだった。

――アキもまた、この風の強さにおどろいていた。

「すごい風だな。夏なのに」

周りの木がざわざわと音を立てる。
風は一瞬で通り過ぎて行ったが、広場には瞬く間に木の葉が散らばった。
アキの周りにもたくさん。
そのうちの一枚を拾い上げて、何気なく指で弄ぶ。はらりとその葉が落ちた時、アキはふと気づいた。

「…白い…なんだ？」

遠くの地面でなにか白いものが動いていたのだ。
一定の間隔で動く、白い鳥のようにも見えた。

好奇心には勝てなかったアキ。もし鳥ならば、とゆっくりと白い物体に近づいていった。
近づいてみると、それは鳥などではなく、白い帽子だった。
「こんなところに帽子？誰のだ…？」
手にとってみると、それはサイズも小さく、アキよりも小さな子のもののようだ。
「…に、しても…」
男の子はその様子をすべて見ていた。
「オレの帽子…！」
あれがないと大変だ。
「あっ」
見れば、広場の少年は帽子を片手に持ったまま、歩いて行ってしまうところではないか。
「ど、どうしよう…！ま、まずいぞ」
わたわたとあわてていた男の子だったが、アキが行ってしまうのを見ると、諦めたように木の影から飛び出した。

第6話

「それ…か、返せよ！」

急に背後から声をかけられてアキは足をとめた。
そして振り返って、声の主の正体を見た――瞬間、吹き出した。

「な、なんだよ…っ、そのポーズ……くくっ」
「うるさいぞ！」

それもそのはず、後ろに立っていた男の子は両腕で頭を覆っていたのだ。

「いいから、それ返せ！」
「いや、その前に…なんでその格好？」
「ほっとけ！それ、オレの大事な帽子なんだ！」

アキは持っていた帽子を見た。
白い小さなそれは、確かに男の子のもののようだった。

「これか？」

帽子をひらひらさせる。

「それに決まってるだろ、早く返せ！」
「えー…」
「なんでだよ！」

こういう状況に出会ってしまうと、すぐに返したくなくなるのが人間というもの。
しかも、アキの場合は、相手がちょうどからかいがいのある年頃というのもあり、謎の格好をしているこの男の子で父が帰って来るまでの暇つぶしをしようと決めていた。

「俺から奪い返せたら、考えようか」

帽子を持つ手を高くあげる。

「届くか？」
「〜〜〜〜〜っ」

男の子は恨めしそうにアキを睨んでいる。
でも、頭を覆う手はそのまま。何か、アキに見せられないものがあるとでもいうのだろうか。

「お前サイテーだな！やっぱヒトだ…っ」
「ヒト？」

アキが眉をひそめた――その瞬間、男の子が駆け出した。
瞬きひとつの間にアキの前まで迫る。
そして地を強く蹴って、跳びあがった。

「……え」

空中の男の子と目が合った。
彼は一瞬、深い憎しみと悲しみが交差する目でアキを見た。
が、アキの目が自分の頭に移るのに気づくと、ニッと笑った。いたずらっぽい笑いだった。

「あーあ、ばれちゃったかー」
ストンと静かな音で着地する。
「ま、いっか。何にも知らないみたいだからな」
「あ」
男の子はあの帽子を人差し指でくるくる回していた。
もちろんアキの掲げた手には何も残っていない。
「い、いつの間に…」
「ちょろいな。ヒトの動きは遅すぎる」
「え…おま、え…」
アキが全て言い切る前に男の子は帽子を深くかぶる。
そしてまたニッと笑った。
「こんなところで、まさか迷子かあ？オレより年上のくせしてさ」
「迷子じゃ…」
「じゃ、なんでここにいるわけ？」
「それは…」
それは…言えない。
もうすっかり立場は逆転、男の子のペースだった。
「なんで言えないの？そんな証拠ぶらさげてて」
証拠――――。

「！これは…っ、ちが…」

腰の銃に手が触れる。意識的にそれを隠そうと手が動く。

「撃てば？」

パッと男の子の姿が視界から消えた――かと思うと、アキの隣に立っていた。

アキが反応するより先に男の子は銃を奪い取って、自分のこめかみにあてた。

銃がカチッと嫌な音をたてる。

第６話（後書き）

男の子（名前だしたれや）の運命やいかに！

第7話

「おいっ、お前何やって…！」

男の子をとめようと飛びかかったが、あっさりと避けられ、それどころかアキの上を跳び越えてみせた。

「だってオレ、殺されたいんだもん。お前に頼もっかと思ったけど――」

振り返ると、男の子はまた銃を自分に押し当てていた。

「――だめみたいだし」

「殺されたい…って…」

男の子はふぅと息をつき、帽子をとった。

「オレの父さん達みたいにさ」

ケモノ。

アキ達はそう呼んでいる。

動物の耳を持ち、いつか街を襲おうと企んでいる化け物。

「ケモノ…」

「ケモノ？ああ、ヒトはオレらのこと、そう呼んでるんだったっけ」

ケモノは凶暴で…ヒトを憎んでいる。

「オレ達からしたら、そっちのほうが狂った獣だ。オレの親も“化け物”そう言われて死んだ」
男の子は自分の耳――黒いウサギの耳に触れた。
「だから、オレもいっそ死んでやろうと思って」
この世界に生まれなかったら…よかったのに。
銃を持つ手に力が入る。
「……っ、だめだッ」
再び男の子につかみかかる。
が、今度も人間にはとうてい不可能な跳躍で避けられてしまう。
「死んだら…っ、だめだ……！」
「なんで？ヒトがなんでそんなこと言う？」
「……っ」
何度も飛びかかるが避けられる。速い。
それでもアキは、避けられても、避けられても男の子をとめようとする。
しかし男の子は今にも引き金を引いてしまいそうで。
「簡単に、死ぬとか言うなっ」
「だから…なんでヒトのくせして、そんな必死に…」
「そんなの今は関係ない！！」
ビクッとして男の子は動きを止めた。
アキも肩で息をしながら男の子を見据える。

「関係ない、だろ？……ヒトだとか、ケモノだとか。どっちも同じ人間なんだから」
「お前…ヘンなこと言うな…」

ずっと言えなかっただけで、ずっとおかしいと思っていた。

「ケモノだって俺達と同じ存在だ。そんな存在が今、消えようとしている。それをとめて何が悪い？」

言えなかっただけ。
これは言い訳だ、分かっている。アキも何も行動に移さない、という形でケモノへの差別に参加していたのだから。
しかし今日初めてケモノを前にして、何が変わった。
人間だ。ケモノだって同じ人間だ。
同じ人間をなぜ殺すのか。

「でもよ…お前はそうでも、他のやつらは違うだろ！？オレの両親を殺して喜んでたッ」
「！！」

銃の音がいやに響いた。

「父さんと母さんに会いに行くんだ！！こんな大っ嫌いな世界、出ていってやるんだ！！」

ヤバい。
そう思った時には、もう走り出していた。

「やめろ！！」

確かな、感触と温もり。

タアァ――――…ンッ……

乾いた銃声が空の音と消えていった。

第7話（後書き）

シリアスにつき、あとがき無しです

第8話

その音に驚いたのか、鳥が数羽飛び立った。
そして、静寂。

「…っあー…耳がガンガンする…」

しばらくするとアキが起き上がった。耳を押さえながら辺りを見回す。

「っ、おい、大丈夫か？」

すぐ隣には、あの男の子が倒れていた。
眼を閉じてぐったりしている。

「どうした！？まさか…」

さっきの弾があたったのか。不吉な考えに目の前が真っ白になる。
俺の銃が命を奪った――――？
アキはその場にくたっと座り込んだ。
助けられなかった。あれだけ言っておいて、救えなかった。

「……ごめん」

すぐ前で倒れている男の子は青白い顔をしていて、まるで生気を感じられない。

「お前は…これを望んでたんだよな…」

じわっとアキの目に涙が浮かんだ。
目の前で人が死ぬなんて、もちろん初めてだ。
それが今日会ったばかりの名前も知らない他人だったとしても、こんなに悲しくて苦しくなる。

「ごめんな……っ」

助けられなくて。
ついに涙がぽろっと落ちた。
“ありがとな”そう男の子の声で聞こえた気がした。

「ごめん」

しばらくただ座って遠くを見つめていた。
泣いたせいか、頭がガンガンする。

「埋めてやらないとな…」

立ち上がると、少しふらついた。ずいぶん長い間座っていたのだろう。
男の子を抱えあげ――たのだか、そこである違和感を覚えた。

「……ん?」

なぜか…男の子の体が震えていたのだ。
怪訝そうに男の子の顔を見つめるアキ。するとゆっくりと顔をそらしていった。

「……お前……」

なんの迷いもなく、男の子を地面に落とす。

「っで！」

「お前……なにしてたのかなぁー」

「騙されるほうが悪いんだ」

男の子はケラケラ笑うと、アキの前にぴょんと立った。

長いウサギの耳が風に揺られる。

「血ぃ出てないし。そんなのにも気づかなかったんだなー。よっぽど気が動転してたんだ」

もう一度笑うと今度は背伸びしてアキの肩を軽く叩いた。

「にしても…ほんとに埋める気だったろ？危なっ」

その手をはらうと、アキはあらぬ方向を向いた。

「姫だっこまでしてさ…くくっ、あー恥ずかしかったー」

無言で歩きだすアキ。

それに気づいた男の子、一歩１ｍのペースでぴょんぴょん追いかけて来る。

一体どこからが演技だったのか。

「待てよー」

「帰る」

「なんでだよー」

「お前が俺を騙したからだ」

スピードを上げても男の子はついてくる。それも楽しそうに跳ねながら。
アキも帰るとは言ったものの、父がここへ戻ってくるまでは帰るわけにいかず、結局は広場の中をぐるぐる歩き回るだけ。

「オレさ、お前のこと気に入ったんだよね」

アキが疲れてその場に座り込むと、男の子も一緒にちょこんと座った。

「なー、お前名前はー？」
「そっちから言え。自己紹介の時は自分から。常識だろ」

そういえば、ふたりとも出会ってから一度も名乗っていなかったのだ。
それを忘れるほど、少しの間にいろいろありすぎた。

「ちぇー。オレはミナト！で、黒月（くろづき）ウサギの亜人。よろしく！」

男の子――ミナトはニカッと笑ってみせた。

「あじん？」
「こういうのが付いてる人間のこと」

自分の耳を引っ張ってみせる。
つやつやしていて、触ってみたくなるような黒をアキはどこかで見たことがあるような気がした。

「お前らはケモノって呼んでるらしいけど」

その考えはミナトの明るい声にかき消された。
オレ達にもちゃんとした名前があるんだぜー。と語っているミナトの笑顔は、騙されたばかりなのに怒る気もなくしてしまった。

「次はお前な」
「俺は……アキ」

びしぃっと指差されて仕方なく名乗る。
すると名前を聞いたミナトは目を輝かせた。

「アキ、だな。へぇー、女の子みたいな名前」

なぜかぴょんぴょん跳ねながら、アキちゃんアキちゃんと繰り返している。
それを見ながらアキは額を押さえて溜め息をついた。これたがら名前を言うのは嫌いだ。
それにしても、なぜこんなになつかれてしまったのか。
ついさっきまではアキのことをあれほど嫌っていたのに、今はどこへ行ってもついてくる。
試しに立ち上がってその場を離れると。

「おい、おいてくなよー」

やはり、ついてきた。

「…なんで俺にくっついてくるわけ」
「アキがいいやつだからだ！」

ミナトはぴょーんと跳ねて言った。

アキの上を飛び越えて反対側に着地する。

「…すごいな」

一瞬の出来事に、つい正直な感想が漏れてしまう。

「そのジャンプ力も、亜人…だっけ？…だからか？」

それに足の速さも。

先刻、アキから逃れていた時の動きは、あきらかに人間のものではなかった。

「そ。オレ達はこれの種族の力を受け継ぐんだ」

「と、いうことは？」

「ということは――、オレはウサギの亜人だからジャンプ力と脚力がハンパない。でもウサギだからニンジンが好きとか、そういうのはないからな。オレ、野菜全般嫌いだし」

いまいち話についていけていないアキに気づいたのか、聞いていないことまで教えてくれた。

聞くよりも見たほうが早いとでも言うのだろうか、ミナトは走っていったかと思うと、３ｍほども飛び上がっていた。

「ほら、アキー、見ろよー」

「見てるって」

そしてまた戻ってくる。

少しでもアキと離れたくないかのように。

「んで、さっきの死んだふりも亜人の特技」

「なるほど。リアル過ぎて埋めるところだった」

いや、ほんとに埋めてしまおうか。今からでも遅くない。

「ミナト、そろそろ帽子かぶれよ」

「お、おう」

ミナトがずっと大事そうに握っていた白い帽子を深くかぶる。

その直後、すぐ近くで聞き慣れた声が聞こえた。

第8話（後書き）

ウサギさんのキャラが変わってる？

そんなことはありません。

第9話

「アキー！！」
「うわ…父さんだ」

父が広場に入ってきたのは一瞬の後で、ミナトが隠れる時間がなかった。

「やべ…」
「どうする？俺の父さん危険だぞ」

答える隙もなく父が来て、ミナトはアキの後ろに隠れる。

「アキ？その子は？」
「えー…っと…」
「ん？」

昨日の夜のことがあってから、面と向かって父と話すのがトラウマになってしまった。
答えずにいると父は怪訝そうにして今度はミナトに声をかけた。

「君、どうしてこんなところに来たんだい？」

つまりターゲットがアキからミナトに移る。

「知るかっ」

ミナトはなるべくアキの父と目を合わせないよう、下を向いている。

後ろから服を強く掴まれる。
何とかしろ、ということだろうか。
「あー…その…こいつは――――」
間違っても、ケモノだ、とは言えない。
言ったら即、ミナトは殺られるだろうし、アキだってケモノである
ミナトをかくまったのだから無事ではすまないだろう。
「なんだ、言えないのか？」
父の目が鋭くなる。
「まさか…」
「違う」
とりあえず否定しておく。
まさか、ケモノか？と言いたかったに決まっているから。
「こいつは普通に人間だ」
「そ、そうだっ」
アキの背中からミナトがちょこっと覗く。
「えっと、オレ、父さんと母さんがいなくなっちまって…その…」
「あ、ああ…ひとりでここにいたから、遊んでやってたんだ」
嘘とも本当ともつかないミナトの発言に、アキも口裏を合わせる。
「ほんとなのか？」

「ほんとだっ」

隠れるのをやめ、くってかかる。

「ふたりがいなくなって丸一日たつのに、どっちも帰ってこないから…オレ、ここで待ってたんだ！！」

アキと初めて話した時のような激しい口調だ。
どっちも帰ってこない――。
いくら待っても帰ってくるはずはない。それでもミナトはそれを信じたくないようだった。
たとえアキの父がミナトの両親を殺したわけでなくとも、ミナトは全てのヒトは悪だと考えている。

「ほぉ…。親が消えたのか。捨て子…かな」
「そんなんじゃない！！」
「そうかそうか」

父の表情が優しくなる。
ミナトは親に見捨てられた捨て子だと、父の中ではもう固定されてしまったようだ。

「大変だったなあ」
「だから…！」

いくらミナトが反論しても、父は笑ってうんうんと頷くだけ。
決定事項らしい。

「ミナト」

アキがほっとけとでも言うように首を横に振ると、しぶしぶミナトは黙り込んだ。
ミナトの『ヒトは悪』という方程式で、例外なのはアキだけらしい。

「――と、いうわけだから」

父さんが単純でよかったと心の中で息をつく。

「ミナト君と言うんだね？」
「……そうだけど」
「今日はどこで寝るつもりだったんだい」
「…そこの洞窟」

ミナトが指差したのは、広場の奥、そびえる崖にぽっかり開いた洞窟だった。
見た感じ、かなり深そうだ。

「そうか…ミナト君」

父さんは一度手をぽんと叩いた。

「うちに来るか？」

突拍子もない言葉に、アキもミナトも固まった。

第9話（後書き）

お気に入り登録が増えてました！
ありがとうございます！

第１０話

そんな中、アキの父だけが笑っている。

「泊まるところがないんだろう？それなら、うちにおいで。ここに泊まるのは危険だから。怖い動物が出るかもしれないぞ」

別に亜人にとって野性の獣は危険の対象ではない。しかし、今まで暮らしていたと言っても、洞窟で寝るのは体には良くないだろう。ミナトとアキは顔を見合わせた。

「ど、どうする」

「んなことオレに聞くなよ」

「お前のことだろ」

――――と、不意に父がミナトのほうへ手を伸ばした。

「なっ？」

どうやらミナトの頭のほうへのようだ。帽子を取られてしまうともうどうしようもない。

もしかして最初からばれていたのか？

「なっ、なんだよ…」

じりっと地面が重い音を立てる。

「なんで逃げるんだ？」

「別に…」

父はにっこりしているから余計に怖い。

「父さん、何して…」

そろそろ本当に不味いと、アキが止めようとしたが――――――遅かった。

迫る恐怖に目を閉じたミナト。

頭に、帽子に触れる手。

「よろしく、ミナト君」

「は？」

その言葉に、ふたり同時に脱力した。

父はミナトの頭に優しく手を置いただけだったからだ。

「へ…は、はは……よろしく、お願いします…？」

それでいいのか不安だったが、ミナトが大嫌いなヒトになでられ、ぼーっとしているのを見て、ついつい笑ってしまった。

「帰るか」

やることは全てしたと、さっさと歩き出す父。

「アキー…オレどうしよ…」

「そんなこと言ったって来るしかないだろ…。でも、先に教えとくけど――――――」

「ああ、あのヒト、ハンターなんだろ」

「ハンター…か。ま、そうだけど」

「おーい、遅れると帰れなくなるぞー」と、遠くから呆れ声の父が二人を呼ぶ。

アキはたたっと走ってミナトを肩越しに見た。

ミナトはしばらく戸惑っていたようだが、やがてぴょんと跳ねて追いついてきた。

「こら。ばれてもいいのか」

「あ、やべ…」

「ただいまー」

アキは一度我が家へ駆け込んでからミナトのことを思い出して、顔だけひょこっと覗かせた。

「ほら、入れよ」

「でもよー」

いざとなってみると怖くなったのか、玄関への一歩をなかなか踏み出そうとしない。

「頑張ってここまで来たんだから」

アキの家に着くまでには、街の大通りを通り抜けてこなければならない。裏道を通る近道も知ってはいたが、おかしな行動をして父に

怪しまれてはたまらない。
帰り道の間中ミナトはアキにしがみついて、「アキ、ヒトだ、ヒトがいっぱいいる…っ」と震えていたのだが、なんとかここまで来たのだった。

「ミナト君？どうぞ、遠慮はいらないよ」

いきなりドアが大きく開き、バランスを崩したアキを無視して、父はミナトを家の中へ引っ張り込んだ。

「ここは今日からミナト君の家なんだから」

玄関をまっすぐ行ったところにあるダイニングから、カイが出てきた。

「お父さん、アキ、おかえり！……あれ？」
「な…なんだよ…」

カイに見つめられ、ミナトはまたしてもアキの後ろに隠れた。

「誰？」
「ミナト、だよ」

いくら経っても顔を出そうとしないミナトの代わりにアキが答える。

「アキの友達？遊びに来たの？それなら僕に部屋に行こうよっ」
「待てこら、勝手に話を進めるな。この時間に遊びに来るとかおかしいだろ。それにあの部屋は、僕の部屋じゃなくて、僕達（ふたり）の部屋だろ」
「じゃあ、僕たちの部屋行こっ」

「なあ…俺の話聞いてたか？」
「え？」
そんなコントのようなふたりの会話を聞いていたミナトは恐る恐る顔を出した。
「あっ、ミナト！行こー？」
「何でもう呼び捨てなんだよ…。悪い、ミナト。こいつ俺の弟、カイ」
「よろしくね」
「馬鹿なだけで、危害は加えないと思うから」
なんだよーとふて腐れるカイ。
危害は加えない？うそだ。
今はいいけど、オレの耳を見たら、豹変するに違いない。
両親を殺したあいつのように。あいつは血の中で笑ってた。遠目でよく見えなかったけど、ふたりを殺して狂ったように笑ってた。
「ミナト？」
ぺしっとでこピンされてミナトは我に返った。顔のすぐ前でアキがにやっとしていた。
「いってぇなぁ…」
そんなことをしているうちにダイニングから父がふたりの名前を呼んだ。
ミナトをくっつけたままダイニングに向かうと父と母が並んでテーブルについていた。

「話は聞いたわ。ミナト君」

母にうながされて、向かいに座る。
カイは椅子が足りないため、ぶつぶつ言いながら立っている。今度もうひとつ椅子を買わなきゃね。と母が笑っていた。

「……で、ミナト君はこれからここに住むってことでいいのよね？」
「ああ。…なんか、そうなった」

帽子に触れる。
不安になった時のくせなのだろう。

「私は賛成だから、安心して。もうふたりもいるんだもの、ひとりくらい増えたってかまわないわ」

ミナトの不安な表情を読み取ったのか、母はそう言った。

「やったな、ミナト」
「これは…喜ぶべきなのか？」

ミナトがつぶやいたのをどういう意味にとったのかは知らないが、父は豪快に笑った。

第１０話（後書き）

またお気に入りが増えてる…っ

そんなわけで調子に乗って更新してみました。

夏休みの課題は放置です。

第１１話（前書き）

きりが悪く、いつもより長くなってしまいました。

第11話

「話、おしまい？よっし、ミナト上行こーよ」

ミナトが了承するより先に、カイはミナトを立たせると引っ張っていった。

「アキ――――っ」

「おいおい…」

二人の姿が部屋の外へ消えた。

帽子が落ちさえしなければ大丈夫だろうが、もうそうなってしまった場合はかなり不味いことになる。カイはケモノを狩る父に憧れているのだ。

とりあえず、部屋まで行こうと立ち上がったアキを母が呼び止めた。

「何…母さん」

「ミナト君って、アキのことが好きなのね」

突拍子もない母の発言に、一瞬だけぽかんとする。

「だって、すぐアキにくっついて」

それは俺以外を信用していないからで…とは言えず、アキは曖昧に返事をしてダイニングを出た。

「ぶへっ」

部屋に入った瞬間、いきなり何かが飛んできて、顔に直撃した。

「あっ、ごめんね、アキ」

どうやら飛んできたのは“アキの枕”でカイが投げたものらしい。それを拾ってベッドに戻す。ミナトはアキのベッドにちょこんと座っていた。

「アキ！遅いぞ！」

「そんなに遅くはないと思うけど」

アキも自分のベッドに腰掛ける。

「すげーな、ここ！ふわふわしてる！アキはいっつもこんなとこで寝てんのか？」

「まあ…いちおう」

ベッドをべしべし叩いてはしゃいでいるミナトを見て、つれてきてよかったと思うと同時に、こう考えずにいられなかった。

もし今日、俺がミナトに会っていなかったら。ミナトはずっとあの洞窟にいたのだろうか。帰ってくるはずのない両親を想いながら。ミナトも楽しんでいるようだし、やっぱり街につれてきたのは正解だった。

「おかえしだ！」

枕投げが再開される。

枕は見事にカイに命中して、ベッドから落とすことに成功した。
「やったなぁ？」
再び枕をかまえるカイをミナトは片手で制す。
「オレ、ちょっとアキと話すことあるから。ひとりでやってて？」
「えー？」
それでもカイは諦めて絵本寄りの本を読み始めた。
それを確認してから、ミナトはアキに向き直る。
「…で、何？」
「オレ、本当にここにいてもいいのか？」
カイに聞かれないように部屋の隅、アキの机へと移動し、小声で話しているが、カイはすでに自分の世界のようだ。
「なんで？父さんも母さんもいいって言っただろ？」
「でも、もしばれたら…。オレはまたあの洞窟に戻るのか？あの場所は父さん達と暮らした大切な場所だけど…」
残りは言われなくてもわかった。
洞窟と比べれば、こっちのほうが何倍もいいに決まっている。ふわふわのベッドは初めてだと言ったミナト。アキとしてもあの森へ帰したくはなかった。
「それに、カイだっけ？あいつとも…なんとなくだけど…上手くやっていける気がしない」

アキは鼻歌まじりに本を読んでいるカイを見た。
「カイと？さっきまで普通に遊んでただろ？」
「なんとなく…。亜人の勘」
確かにカイは父のせいもありケモノは悪だと信じている。だが、ミナトにその話はしていないはずだ。
本当に亜人の勘とやらが存在するのならば、このままカイとミナトを同じ部屋で生活させるのは危険かもしれない。寝るときまで帽子をかぶって寝るわけにもいかないだろうし。
「明日にでも何とかするか…」
「何とかって？」
「隣の部屋見たか？本当はあっちがカイの部屋になるはずだったんだよ。結局ベッド動かすのが面倒で一緒の部屋で寝てるから、今は物置になってる」
ミナトはこの部屋に来るまでを思い返す。確かに隣にもうひとつドアがあった気もする。
「じゃあ…」
「ミナトはそっちの部屋で……なんでそんなに不満げだ」
「アキは」
「オレはこっちの部屋でいいだろ」
帽子があっても、耳がしゅんとしたのがわかった。
アキはため息をついて負けを認める。
「はいはい。俺もむこうに引っ越します」

今度は耳がぴくっとはねた。

「やった！」

と、急にミナトは頭を下げた。
その直後、明日は忙しくなるな…とぼんやり考えていたアキの顔にまた枕が直撃した。

「ってぇー…」
「ははっ、ばーか」
「あれー？なんで避けれたの？」

犯人はまたもやカイ。こっちに枕を投げた格好のまま疑問符を飛ばしている。
アキに当たったのは気にしていない様子。

「なんでだろーな」

今、ミナトはカイに背を向けていたのに飛んでくる枕を避けた。
カイが再び本に目をおとしてからミナトはにやりと笑った。

「オレ、耳いいから。ウサギだし」
「なるほど。でも、俺にも教えてくれればいいのに」

何故かアキのベッドまで飛んできていたクッションをつかむ。
そして、投げた。

「ぐぇっ」

いくら耳がよくてもこれは避けられず、ミナトは腹で受けた。

「くっそぉ～っ」

今度はミナトの反撃だ。
アキの枕とカイの代用枕のクッションをひとつずつ両手に持つ。

「ミナト爆弾！！」
「おいおいっ」

とっさに横へ跳んで避ける。
その拍子にペン立てが倒れ、机の上に文房具がぶちまけられたのは気にしない。

「なになに？僕もやる！」

カイも参戦し、徐々にヒートアップする枕投げ。
結局、その戦いは母によるお説教をもって終結したのだった。

次の日。
ジリリリリリ…
激しい目覚ましの音でアキは目を覚ました。

「あー…」

眠い目を擦りながら目覚ましを止め、そこでようやく気づいた。

「…お前、何してんの」

あれだけ大きな音がしたのにまだ寝ているカイの隣で、ミナトが帽子越しにウサギの耳を押さえてうずくまっていた。帽子は起きてすぐ被ったらしい。

「ぐあぁぁぁぁ」

「だから何してんだ」

涙目で今や沈黙した目覚まし時計を指差す。

「あれ！あのうるさいの捨てろ！耳が壊れる！」

「ああ、目覚まし。ミナトの耳にはきつかったか」

捨てるわけにはいかないので、枕元から棚の上に移動して、それで我慢してもらう。

そうしてるうちにカイが起きた。

下の階からお呼びがかかる。

「ふたりともー…じゃなくて、さんにんともー、早く下りてきなさーい」

起きたばかりにもかかわらず、真っ先にカイが部屋を飛び出していった。

それを見送ってからミナトは何のことか理解する。

「朝飯か！」

そうして、ぴょーんと一度高く跳ねた。天井にタッチして身軽に着地。

「アキ！オレここ好きだ！知らないことばっかだし、怖いやつもい

るけどな、洞窟なんかより絶対暮らしやすい！父さん母さんにもこんなとこに住んでもらいたかったなー」

「…ミナ」

声をかける前にミナトは部屋を出て行ってしまった。
アキはため息混じりに笑ってそれを追う。
朝ごはんのいいにおいが漂ってきた。

ウサギ跳ねたその朝に。
ふたりの運命はまだ動き始めたばかり。

第一章　了

第１１話（後書き）

第一章終了です。ここまで読んでいただき本当にありがとうございます。

さて、次の章では新しい亜人さんが登場する予定です。
なるべく早く更新したいなと思ってます。

番外編（前書き）

原作にはないお話。一人称です。
誰のお話か考えながら読んでみてください。
まあ、すぐ解ると思いますが。

番外編

今日、おれはいつもよりはやく目がさめた。
いそいでかあさんのところへ走る。

「…ねえ、かあさん！」
「どうしたの？」
「…あ、えーと…今日って…今日ってなんの日かしってる？」
「今日？何かあったかしら？」
「……！…やっぱ、なんでもない」

今日はおれの5歳のたんじょーびだ。
かあさんに、『たんじょーび』は、おれが4さいから5さいになる日ってきいてから、ずっと前から今日を待ってた。
それなのにかあさんは覚えていないみたい。かあさんがでおしえてくれたのに、ひどいぞ！

「とーさん！今日はなんの日かしってる？」
「何の日か？んー…何の日だろうな…」
「……」

とーさんも覚えてない！なんでなんで！

「おれのたんじょーび！！」

おれはとーさんとかあさんにせなかをむけて走り出した。
もうしらない！
おれのたんじょーびなんてどうでもいいんだ！

ずっとずっと走って家をとびだした。
おれのたんじょーびを思いだしても家には帰らないぞ！いえでしてやる！

「たんじょーび…ううん、もういいもん！」

でもけっきょく、おれは家にかえった。空がちょうど赤くなったくらいだった。
一日あるいておなかがすいたからだ。さみしくなったからじゃないぞ。
ごはんをたべたら、もういちど、いえでしてやる。

「あら、帰ってたの。もうご飯よ？」

ほっぺをふくらませて家にもどると、かあさんがごはんのじゅんびをしていた。
おれがいえでしてたのに…。

「早く手を洗ってらっしゃい」

なにも言わないで手をあらいにいく。おれのうしろでかあさんがわらったような気がした。
わらってもゆるさないぞ！
手をあらってから、ごはんをたべに行くと、ふたりともさきにすわっていた。
ふたりはおれを見つけると、すっごいすっごいわらった。

「Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ！！」

「え？」

つくえの上には大きなケーキ。
ろうそくが５ほん。ひらがなで『はっぴーばーすでぃ』ってかいてあるチョコ。

「主役がなに変な顔してるんだ？」
「早く早く！ろうそくが消えちゃうわよ」

おれはびっくりしたままろうそくの火をけした。

「わすれてなかったの…？」
「忘れるわけないだろ」
「いきなりケーキを出したらびっくりするかなーって思ったの。そのせいで怒らせちゃったみたいだけど」

ふたりはわらいながらまだ何か言ってたけど、もうおれはきいてなかった。
ケーキだ…。
ふたりともおれのたんじょーび、わすれたんじゃなかったんだ。

「いえで…」
「ん？何か言ったか？」

「いえでして、ごめんなさい…」

うれしくて、なんでかなみだが出た。

ふたりはおれを見て、またわらった。

「お誕生日、おめでとう」

とーさんがおれのあたまに白いのをのせる。

「ぼうし…？」

「次のケーキは一緒に買い物に行こうか。ミナト」

おれは白いぼうしをかぶって、ぴょーんとジャンプした。

「いく！」

その日からこのぼうしはおれのたからものになった。

どこへ行くにもこの帽子は一緒で。安全な森の中でも被っていた。
初めて街に買い物に行った日はもちろん。
父さんと母さんが、いなくなったあの日も。
そして、アキとオレが出会ったあの日も。

今思えば、アキと出会えたのは、この帽子が飛ばされたのが原因だったのかも。

もし、そうだったなら。

ありがとう。とーさん、かあさん。アキに会わせてくれて。

番外編（後書き）

答えは、ミナト君でした。
アキと迷ってくれてたら、作者の思惑通り。

第１２話（前書き）

第２章突入です！

第12話

怖い。暗い。
広い世界で私はたった一人になってしまった。

ミナトがアキの家で暮らし初めてから最初の一週間が過ぎていった。生まれてからずっと洞窟暮らしだったミナトにとって、ヒトの暮らしは快適そのもので、一週間ですっかり気に入ってしまったようだ。最初の頃は、知らないことが多すぎて、アキはフォローの日々だったが。

「ミナト。今日は外にも行ってみないか？閉じこもってちゃ、身体に悪い」
「……やだ」

気に入ったとは言っても、それは家の中がの話で、ミナトはアキと暮らしはじめてから一度も街に出ようとはしていなかった。

「ヒトが怖いのは分かる。でもな、いつかは外に出ないと…父さんと母さんが心配するし、もしかしたら外に出ないことを怪しむかもしれない」

実際アキは何度か、ミナト君調子が悪いの？と聞かれたりもしていた。その度、慣れない暮らしで疲れてるだけだろと答えてはいるも

のの、そろそろその言い訳も厳しくなってくるだろう。

「それに今日は『市場の日』だ」

「いちば？いちばって何だ？」

ミナトは初めて聞くらしい。

ここエリルでは毎週週末に大通りで市場が開放される。そんなに大きなものではない。ちょっとしたフリーマーケットだ。

「うーんとなぁ…んー…まぁ、聞くより自分の目で見たほうが早いだろ」

「それ、オレが行く前提だろ」

「行かないのか？」

耳を立ててふくれっ面になる。

「ヒトがいるだろ！」

「どこに行ってもいるって。あーあ、美味しい物もいっぱい売ってるのになー。俺一人で食べてこようかなー」

今度は耳がゆらゆら揺れている。どうやらもう一押しらしい。

「今ならミナトのほしいもの全部買ってやるのになー」

「……い、行く…っ」

と、いうわけでミナトはアキに連れられ、脱引きこもりに成功したのだった。

噴水広場を抜けて大通りに入ると、昼前と言うこともあり、もうすでにたくさんの店が出ていた。

「すごいだろ」

しかしミナトはアキの後ろから出てこようとしない。帽子があって普通の人間となんら変わらない今、隠れているほうが目立つのに。

「隠れてたらほしい物が見つからないぞ。せっかく何でも買ってやるって言ってるのに」

「本当に何でもか？」

「１０００リンまでなら…な」

それに釣られてようやく顔を出すミナト。

「それなら、オレ…ペンダントが欲しい。ガラスのやつ…」

「いいけど…なんで？」

ミナトは顔を真っ赤にして言った。

「父さんと母さんがお揃いで持ってたんだ。でも、二人がいなくなった時…両方奪われたから…」

「形見ってわけか…」

別に恥かしがることではないのでは。

アキは週末が来る度によくここへ足を運んでいたため、どこにどの店が出るのかほとんど知っているつもりだ。ミナトのためにも、必ずそのペンダントを見つけようと誓った。

「とにかく。そういうのを売ってる店を全部回っていこう」
最初の店はすぐそこにあった。
人気の店なのか大勢の客に囲まれて、近寄らなければ商品は見えなさそうだ。

「どうする？ここで見てみるか？」
「いやー…ここにはねぇぞ」
「よく見えたな…。ちなみに、どんなのを探してるんだ？」
「ガラスで出来てんだけど、黒くてな。んー…オレの耳みたいな色？だな。あと、月の模様が描いてある」

頭の中でイメージ像を作ってみる。

「そんなのあったっけ…」
「きっと、ある！」

目的が出来たことにより、ヒトに対する恐怖を忘れているのかもしれない、ミナトはアキの手を引っ張って歩き出した。
二つ目の店は先ほどの店より更に人が多かった。
店先にはボードに吊るされたネックレスやらブレスレットやらが並んでいて、ミナトの耳のような黒のペンダントも見えた。

「ミナト、見に行…」
「オレ、無理！うん、無理！！」

ところがミナトはその場から動こうとしない…というより店に近づこうとしない。

「あんなヒトの多いところ無理！」
「黒いペンダントあるけど」
「ここは諦めようぜっ」
「他の店になかったら？」
「……」

この市の向こう端まで行って帰ってくるにはかなり時間がかかるし、それにまだ夏のど真ん中だ、なによりアキがめんどくさかった。

「じゃ、じゃあさ…アキが見てきてくれよ」
「なんでそうなるんだよ。…仕方ないな」

ミナトにトンと背中を押され、賑わう人混みの中へアキは突っ込んでいった。
アキが最前列にたどり着くのを見て、ミナトは手を振る。

「アキ、頑張れよー」
「お前も来いっ」

アキは黒いペンダントを次々と手に取っているが、ミナトの言ったような物がないようだ。
ひとつひとつ、もとの場所へ戻していっていた。

「なーんだ、ないのかよー」

落ちていた石をコツンと蹴る。
と、その時、後ろから誰かがぶつかってきた。

「いって」
「あぁ…悪い。人が多いうえに視界が悪くてな」

振り返ると、背の高い人物が立っていた。
マントのような服を纏っていて、顔はフードで見えず、男か女かも解らなかった。

「痛かったか？」
「…別に、大丈夫だ」

その人物はフフッと笑うと行ってしまった。その姿はすぐに人混みに消える。
そこへ示し合わせたかのようにアキが戻ってきた。

「ミナト、なかった」
「んー」
「なんだ、その反応は」

不思議な人だった。俺たちを殺す存在だということすら忘れていた。
忘れて市場にそぐわない不思議な存在感に呑まれていた。

「次行くぞ」
「……おお」

アキの声で我に返り何故か少々お怒りらしいアキから逃げるように駆け出した。
ミナトの全速力に敵うはずもなく、かなり離されてしまう。

「ミナト！」

ヒトの波にミナトの姿が消えた。
ミナトはまだ気づいていないらしい。

「ばか……っ！ミナト、そこ動くな！」

返事がない。
アキはあわてて人と人の間を抜けて走る。
が。

「〜〜〜〜〜っ」

さっきまでいたはずのミナトの姿が消えていた。
もし帽子を落としたりでもしたら、間違いなく殺されてしまう。ただでさえ、いつもより人が多いのだ。
いいことにならないのは目に見えている。
アキは再び人の波を押し分けながら走り出した。

第１２話（後書き）

よろしくお願いします。

第13話

「あ、あれ…？アキが見えないぞ…」

アキの姿がないのにようやく気づいたミナトは、足を止めて今来た道を引き返した。
そうしている間にもたくさんの人がアキとミナトの間を隔てていく。

「アキ！！」

名前を呼んでみてもアキから返事は返ってこない。
実はこの市場、長さはあるものの横幅はあまりない。だから横へ抜けてしまえば人の波からは脱出できるのだが、初めてのミナトはそれを知らなくて当然だった。

「わっ」

きょろきょろしながらもアキを捜して歩き回っていると、正面から誰かにぶつかった。

「……ヒト…」

見上げると、それは髭を生やした巨体の男で、なにやら不機嫌そうにミナトを見下ろしている。

「痛ってぇな…」
「う……」

昼間から酒に酔っているらしい、嫌な匂いが鼻をついた。男はミナトの首根っこ…服をつかむと軽々と持ち上げて見せた。
足が地面から離れる。

「は、はなせ…！」

ミナトがいくら暴れてもその手からは逃れられない。

「ぶつかったんだろ？謝れよー」

「……っ」

そんなことを言われても、息が詰まって声が出ない。
男の腹を蹴ってやろうとさらに暴れる。ミナト、黒月ウサギの脚力なら手を離させるくらいなら簡単なはずだ。離させてすぐ人に紛れてしまえばいい。

「んー？意地でも言わないってかぁ？」

しかし男が手を伸ばしてしまえば、ミナトの足は届かなかった。

「ぶつかって…っきたのは、そっちだろ…！」

男の言い草にだんだん腹が立ってきたミナトは声を絞り出し言ってみせた。
腹が立つのは、自分がこんなことになっているのに助けようとしないヒトに対しても同じだ。周りを歩いているヒト達はミナトの置かれている状況に嫌でも気づくはずなのに、巻き込まれないよう、わざと遠くを通り過ぎていく。

「そっちが、ぶつかってきたんだ…っ」

「あぁ？」
男が急に手を離した。
「って！！」
落とされたミナトは思いっきり腰を打ったが、ようやく呼吸が楽になった。
「…っは、いきなり落とすな、デカ男！」
苦しさと恐怖から涙目になりながらも食って掛かる。
今、目の前にいるのはヒトだ。
亜人を殺す獣だ。
「誰に向かって言ってんだぁ？」
「お前だっ」
男は相当気分を害したようで、鼻で笑うと拳を振り上げた。
「っ！？」
が、ここで子供を殴れば面倒なことになると思いとどまったのだろう、無意識に帽子を押さえていたミナトの腕を乱暴に掴んだ。
――――まさに、その拍子に。
深く被っていたはずの白い帽子が音も立てずに落ちた。
「痛ってぇな！」
ミナトの漆黒の耳が帽子の下から解放され姿をみせる。

それに気づかないほど男に敵意を向けていたミナト。

「ケ、ケ…モノ…」

男の表情が一変し、そう言われて、はっとした。
男の手を振り払い、両手で自分の耳に触れる。

「おまっ、お前…っケモノだったのか…！？」

慌てて帽子を拾い被ってみても、もう遅い。

「ケモノだって！？」
「ケモノがいるのか！？」
「なんでここに！」

さっきまで見て見ぬふりをしていたはずの人々が、男の声を聞いて集まってきたのだ。

「な…んだよ…っ」

あっという間に男とミナトの周りにヒトの壁ができた。
しめたとばかりに男は集まった人々にこう言い放つ。

「こいつはケモノだ！俺に襲い掛かってきやがった！」
「違う！！そいつがオレにぶつかっ…」

ミナトの言葉は途中で途切れた。
自分を取り囲むヒト達の冷たい目、蔑んだ目、亜人を気味悪がる目。
そうだ。ヒトがケモノの味方につくはずがない。

「俺が歩いてたら急にこいつがぶつかってきやがって、俺が声をかけたら襲ってきた。捕まえたと思ったら振り払われて、この状況ってわけさ」

今まで見ていたのだから、男の嘘だということは知っているはずだ。それなのに、よくやった、大丈夫か、という声ばかりが飛び交っている。

「オレはケモノじゃ…」

後ろから誰かに帽子を奪われた。群集がざわめく。

「耳だ…」

「ケモノの耳…」

なんでこんなことになってしまったのだろう。

「アキ…っ」

第13話（後書き）

ちょっと短めです。
明るい話が書きたいなぁ。

第１４話

「アキ…っ」

あの男がミナトに歩み寄る。
周りに人が集まったことによって、子供のケモノなら危険はないと判断したのだろう。

「さっきは子供だと思って遠慮したけどな、お前がケモノなら話は別だよなぁ」

他のヒトも、次々と男をあおる。

「いいぞ、捕まえろ！」
「殺せ！」
「ケモノは殺してしまえ！」

誰かも分からない人に耳を掴まれる。

「いたっ…はなせ…っ」

押し寄せてくるヒトに、目を開けていられない。
殺せ、ころせ！ころせ、コロセ！！
声は段々と大きく膨れ上がっていく。
ミナトを囲むヒトの壁は皆笑っていた。
男達に引っ張り起こされるミナトを見て、狂ったように笑っていた。
同じ、だ。
ミナトは今度こそ自分に向かって飛んでくる男の拳を見て、ぼぅっと考えた。

そうか、父さんと母さんが殺された時の…。
ドッという鈍い音と共に頬に熱が走った。
倒れ込むと同時に、脳裏にフラッシュバックする映像。

銃声、悲鳴。
見知らぬ男が森の広場に入ってきた。
その男は銃を持っていて、気づいた父さんがオレを洞窟に押し込む。
その時、男が父さんと母さんに気づく。
運悪く帽子を被っていなかったふたり。
銃声。
倒れる父さん。母さんの悲鳴。
また銃声。
今度は母さんが。
そして笑い声。
静寂。

今も頭にこびりついて離れない。
ミナトは洞窟の奥から全てを見ていて、男がこっちに来るのを見て、
さらに奥へと逃げ込んだ。
どれくらい隠れていただろう。
次にそろそろと洞窟を出た時、両親はいなくなっていて、残されて
いたのは、まだ真っ赤な血溜まりだけだった。

「うっ…ク…ッ」

自分は殴られた頬が痛くて泣いているのか、両親のことが悲しくて
泣いているのか、それとも悔しくて泣いているのか、それも分から
なかった。

ただ涙が溢れた。
群衆からはまだ、うるさいくらいの笑い声が響いてくる。
「やっぱり…、ヒトは、嫌いだ…」
突然、ヒト達がざわめいた。
誰かが間を縫って進んできている。
「アキ…？」
最前列にいた男がひとり、横へ弾き飛ばされた。
違う、アキではない。
マントにフード。見覚えがある。
「…何をしているんだ」
アキと離れたとき、自分にぶつかった人物だ。
「こいつはケモノだ。見ればわかるだろう、私達はケモノを追い出そうとしているだけだ」
「なるほど」
マントの人物はゆっくり、靴音を響かせながらミナトに歩み寄った。
手が差しのべられる。
ミナトは目を丸くした。
またやられると思って、マントの人物を睨んでいたのだ。
見上げると、フードの下の口元が笑っていた。
でもそれは、あの狂った笑い顔ではなく、穏やかな優しいもの。
「おい、あんた何してんだ！」

ヒトがひとり、ふたり間に割り込んでくる。

「自分が何やってるか…」

「黙れ。私はこの子に用がある」

手がミナトに掴めと言うように動いた。

ミナトは少しためらってその手を握った。

ぐいっと力強く引っ張り上げられる。

「なぜケモノを救う必要があるんだ！」

「こいつらはエリルを滅ぼそうとしているんだぞ！ケモノは悪だ！」

ミナトはマントの人物の後ろへ隠れた。マントを強く掴む。

ケモノを憎む、ヒトの目を見るのが怖かった。

なぜ、亜人を嫌う。亜人はなにもしていないじゃないか。

「悪、か。おい、お前、私に何をしていると聞いたな？」

“大丈夫”

そう、小さな声で聞こえた。

男が答えるより先に、マントの人物はおもむろにフードをとった。

「悪が悪をおかして、何が悪い」

空気が一瞬にして、凍った。

フードの下の素顔は女性のもの。しかし、今はそんなこと関係ない。

「ひっ…あ…」

「う、うわあぁぁ…っ」

群衆が皆じりじりとさがっていくのだ。
恐ろしいものを目にしたかのように。ミナトは彼女のほうを見上げて、はっとした。

「…銀華（ぎんか）、オオカミ？」
「あぁ」

女性――銀華オオカミの亜人は、ミナトに笑いかけると自分の尖った耳に触れた。

「大丈夫か？黒月ウサギの少年」

そう言われて急に力の抜けたミナト。その場に座り込んだ。
と、同時に涙がこぼれた。

「泣くな、泣くな。私は少し用があってこの市へ来たのだか…やけに騒がしいと思ってな。来てみたら、この有り様だ」
「オレ、うっかり帽子落としちまって…」
「そうか。もうこんなことにならないよう、気を付けるんだ。…よく頑張った」

頬に手をやると、そこが痛んだ。
いつの間にか、女性はフードを被り直していた。それを見て、ミナトも帽子を被ろうとしたが、誰かに奪われてしまったようで、ない。どうにか手で隠そうとしていると、ばさっと何かを被された。

「これ…」
「私は肉食獣の亜人だからな。ヒトに見つかっても問題はない。まあ、もう見つかっているも同然だが。君のほうが、それが必要だろ

う？」

渡されたのは女性のフード付マントだ。
つまり今、彼女の耳は完全に人目にふれている。
だが、周りを行く人々は、彼女から離れるようにして通りすぎていく。先程までミナトを囲んでいたヒト達は、みんなどこかへ行ってしまった。
銀華オオカミの亜人にむかってくる勇気の持ち主はいなかったということだ。
弱い者には勝ち誇った表情（かお）でくってかかり、強き者には巻き込まれないよう、こそこそと逃げていく。

「オレ…ヒトが許せない」
「なぜ？君はこの市にいたのに」
「それは――――…」

ミナトは昨日までにあったこと全てを亜人の女性に話した。
彼女は信頼できると思ったから。

第１４話（後書き）

お気に入り登録、ありがとうございます。

第15話

人の壁に阻まれて、様子が分からなかった。
皆口々に「ケモノを殺せ！」とあおっていた。

「ミナト…っ」

ミナトが見つかってしまったのかもしれない。いや、そうに違いない。

「くっそ…」

急にアキより遠い側の人々がざわついた。今までとは明らかに違う、どこか怯えを含んだようなざわつき。
急いでそちらへまわる。
人々の言葉が、「殺せ！」から「誰だ？」に変わっていた。
アキがそこへたどり着くとほぼ同時に壁が崩れた。
みな我先にと、後ずさりして逃げていくようだ。
誰かがぶつかっていったが、アキには目もくれず走っていった。

「ミナト…！」

人の壁が完全に崩れて消え去ったとき、その中心で座り込んでいるミナトが見えた。

「……ん？」

誰かと一緒だ。
駆け寄ろうとしていた足が止まる。ミナトの隣に見知らぬ人物が立

っていたからだ。それにミナトはなぜか彼には大き過ぎるマントのような服を纏(まと)っていた。
そうしているうちに、ミナトもアキに気づいた。

「アキー！！」

ぱっと立ち上がって、ウサギのジャンプで飛び付いてきた。

「…ミナト。よかった…」

ミナトはアキにしがみついたまま、ぽろぽろ涙を落としながら震えていた。

「あいつが助けてくれたんだ…」

ミナトの側にいた、あの人のことらしい。

「アキ、ごめん…」
「……ん、無事でよかった」

泣いたままのミナトを軽くなでてから、アキはミナトの言う“あいつ”に目をやった。

「こんにちは。ヒトの子よ」

少し冷たい口調で彼女は言った。
アキは戸惑う。
なぜなら目の前のこの女性は。

「銀華、オオカミの…亜人…」

ミナトがようやく顔をあげた。

「こいつに助けてもらったんだ。オ、オレ…ヒトとぶつかって…帽子が…っ……そしたら、ヒトに囲まれて…」

まだ混乱しているようだったが、言いたいことは何となく伝わった。帽子がないのも、納得がいく。

「ミナトから聞いた。アキ、という名だったな」

ピンと尖ったオオカミの耳。
深い蒼の目がアキをとらえる。その目は鋭く、ヒトであるアキを完全には信頼していない、といったふうだった。

「…はい」

どことなく神秘的な雰囲気を漂わせてる彼女は、確かに亜人、間違いなかった。
だが、ミナトとは違い、耳を隠そうせず堂々とその場に立っていた。
それどころか、逆に人間のほうが彼女を避けるように歩いていく。
これが…肉食獣、銀華オオカミの亜人…。

「どうした。…私が恐ろしいか？」

言葉をなくしていたアキに銀華オオカミの亜人は語りかける。

「……いえ。ミナトで慣れてますから…」

言葉を慎重に選びながら返す。

「そうか。珍しいな、私のこの耳を見るとほとんどのヒトは逃げ出すのに」
「亜人が俺達を襲ったりしないことくらい、知ってるから」
女性は一瞬驚いたようだった。
しかしすぐ悲しそうにアキにむけて笑った。
「全てのヒトがそうであればいいのに、な」
いつの間にか言葉から冷たさは消えていた。
ミナトは彼女がいる間は見つかっても平気だとおもっているのだろうが、顔を覚えられただろうから、もうこの市場には来られないだろう。
「さて、私はそろそろ森へ戻る。…いや、市を出るまでは一緒にいよう」
「…ありがとうございます。えっと…」
「リオだ。名乗っていなかったな」
女性――リオはアキに片手を差し出した。
握手を交わしながら、リオはアキの目をじっと見つめる。
「面白い子だ。今の言葉を信じることにしよう。私のことは、リオと呼んでくれればいい。それと、敬語はいらない。そういったのは、どうも落ち着かないからな」
「……わかった。ミナトを助けてくれてありがとう、リオ」
まだくっついていたミナトを引き剥がして歩き出す。

「何かお礼がしたい。俺にできることは限られるけど」
「そうか？…本当に、面白い子だ。…それなら、１つ頼んでもいいか」

アキは何度も頷いた。
多少無理なことでもするつもりだった。リオがいなければミナトは殺されてしまっていたかもしれないのだから。

「私は森の奥の小屋に住んでいるんだが、１週間ほど前、突然ドアがノックされてな。そんなことなど今までになかったから、その時はヒトだろうと思いながらドアを開けた。だが、そこに立っていたのは初めて見る小さな女の子だったんだ」
「…亜人の？」
「ああ。アキにその子に会ってもらいたい」

会うだけならいくらでもできる。
アキは快く応じた。

「詳しいことは明日にしよう。ミナトも疲れているようだしな。また明日、今度は森に来てくれるとありがたい」

第16話

――翌日。
ミナトをつれて、アキは森の前に立った。
もちろんカイは一緒ではない。森に遊びに行くとでも思ったのか、僕も行く、と最後までねばっていたが、さすがに今日は無理だ。
俺達が帰ったら、何してきたの？とか…煩いだろうな。
そんなことを考えて、アキはもう一度目の前森に目をやった。ここは、ミナトと出会った森であると同時に、ケモノ狩りで亜人を殺していたかもしれない森なのだ。
なかなか足が進まなかった。

「リオ、いないな…。ほんとにここであってんのか？」
「オレが嘘つくように見えるかよ。亜人はみんな、ここを森の出入り口にしてる。ここが一番人目につかないんだ」

昨日は疲れはててていたミナトも、一晩たつと大分本調子に戻ってきたようだ。
この辺りにヒトはいない、とか言って出しっぱなしにしていた耳をピンと立てている。

「とにかく！亜人はここから街に出ていって、市とかで買い物してから、またここ通って森へ帰る！」
「ふーん。ミナトも？」
「オレは一回だけ。それ以外は父さんと母さんが行かせてくれなかったからな」

と、カサッと草木の擦れる小さな音がした。
ミナトが先にそれに気付いて、そこに現れた人物を見つけると、お

っ、と声をもらした。
アキも少し遅れて気付く。

「リオ」

今日はフードもマントもない。

「待っただろう？終わらせなければならないことがあってな」
「今、来たとこ！」

ミナトが先にリオのほうへ駆けていく。
人目がないのをいいことに、大きなジャンプひとつで彼女のもとへたどり着くと、アキに手を振った。

「あのなぁ…」

少し坂になっているところに足を滑らせながらアキも追いつく。

「では、行くか」

三人で黙々と森の中を歩く。
この森に入ったのは、父と一緒だったあの時だけ。亜人と歩くのはもちろん初めてだ。
森に入ってしばらくしたところで、アキは珍しい光景に出会った。

「…り、リオ？さっきから後ろのやつら…気になるんだけど…」
「ああ、気にするな。いつものことだから」
「ヒトはこうなんねぇの？」
「なるわけないだろ！」

アキ達、正しくはミナトの後ろにウサギが列を作り始めた。それも黒月ウサギだけが。
ウサギ達は何処からともなく増えていって、もう5、6羽がぴょこぴょこついてきている。

「オレ、人気者だろ」

ミナトがそのうちの一羽を抱えあげても逃げようとしない。

「別に無理についてこなくてもいいんだぜ？」
「…これ呼んだのお前か、ミナト」
「勝手に集まってくんの！」

なぜか黒いウサギを手渡される。
両手に乗ってしまうような黒い子ウサギは、アキの目をじーっと見つめる。

「……」

仕方なくアキも見つめ返す。
するとウサギは急に暴れだして、アキの腕を引っ掻いたかと思うと、ぴょんと飛び降りた。

「……なんで」
「ぎゃはははは！アキ、嫌われたなっ」

逃げたウサギはミナトの足元へ行き、もう一度アキを見つめると後ろの足を地面に叩きつけた。

「アキ、知ってるか？今のはウサギの威嚇だ」

「それ…教えなくてもいいから、リオ…」

リオもいつの間にか黒いウサギを抱えていた。

「リオは？リオには何もついてこないのか？」

聞くと、待ってましたとばかりに、銀華オオカミの亜人は笑みを浮かべる。

「呼んでやろうか？喰われてもいいならな」

「あ…い、今はいい」

すっかり忘れていた。

今、銀華オオカミがうようよ集まってきたらリオはいいとしても、ウサギも含めこの場に居る者は胃のなかの住人になってしまうだろう。

「オレは銀華オオカミ見たいけどなー」

「喰われても？」

「襲われたら蹴り飛ばす！」

「ああ…そう…」

第１６話（後書き）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2259s/

太陽－Beast Friends－

2011年12月28日00時50分発行